

発掘調査報告 第39集

緊急地方道路整備B事業(平成11年度) 埋蔵文化財発掘調査
緊急地方道路整備A事業(平成12年度)

遊光遺跡

2000. 12

長野県伊那建設事務所
駒ヶ根市教育委員会

発掘調査報告 第39集

緊急地方道路整備B事業(平成11年度) 埋蔵文化財発掘調査
緊急地方道路整備A事業(平成12年度)

遊光遺跡

2000. 12

長野県伊那建設事務所
駒ヶ根市教育委員会

例　　言

- 1 この報告書は、長野県伊那建設事務所が実施する緊急地方道路整備事業－主要地方道伊那生田坂田線に伴う遊光遺跡の発掘調査報告書で、長野県伊那建設事務所の委託を受け、平成11・12年度の2箇年にわたって実施したものである。
- 2 発掘調査は、駒ヶ根市から再委託を受け、駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会が実施した。
- 3 現場での遺構測量、遺物の実測、遺構・遺物の製図は田村巴が行った。遺物の復元は氣賀澤進が当たった。写真撮影は田村があたった。
- 4 遺構番号は、前回の調査からの続き番号としてある。今回の調査に該当するものは、住居址番号－第11号からである。
- 5 遺構・遺物の縮尺は、各図に示してある。
- 6 本報告書の執筆は、第1章・2章・4章を気賀澤が、第3章を田村が担当し、監修は気賀澤が行つた。
- 7 発掘調査及び報告書作成に当たっては、多くの方々からご助言・ご指導を賜つた。とりわけ小平和夫氏からは、適切な指導を賜り感謝にたえない。ここに誌るして謝意としたい。
- 8 遺物及び実測図などの関係資料は、駒ヶ根市立博物館に保管している。

目 次

例 言 目 次

第1章 発掘調査の経緯	1
第1節 事業の経過	1
第2節 発掘調査の組織	2
第2章 遺跡の環境	3
第1節 遺跡の立地	3
第2節 歴史的環境	5
1 伊那村遺跡の発掘調査	5
2 周辺の遺跡	5
3 遊遊遺跡に関連する遺跡について	8
第3章 発掘調査	9
第1節 調査の経過	9
1 過去の調査について	9
2 調査概要	9
3 発掘調査作業日誌(抄)	10
第2節 遺構と遺物	16
1 第11号住居址	16
2 第12号住居址	16
3 第13号住居址	17
4 第14号住居址	17
5 第15号住居址	18
第4章 まとめ	18

挿図目次

第 1 図 遊光遺跡位置図	4
第 2 図 遊光遺跡周辺の遺跡位置図	6
第 3 図 遊光遺跡調査概要図（折り込み）	13
第 4 図 遊光遺跡遺構全体図（折り込み）	13
第 5 図 調査遺構全体図	15
第 6 図 第 11 号住居址実測図	19
第 7 図 第 11 号住居址出土遺物	19
第 8 図 第 12 号住居址実測図	20
第 9 図 第 12 号住居址出土遺物	20
第 10 図 第 12 号住居址出土遺物	21
第 11 図 第 13 号住居址実測図	21
第 12 図 第 14 号住居址実測図	22
第 13 図 第 14 号住居址出土遺物	22
第 14 図 第 14 号住居址出土遺物	23
第 15 図 第 15 号住居址実測図	24
第 16 図 第 15 号住居址出土遺物	24

図版目次

図版 1 遺跡遠景	25
図版 2 遺構全景と第 11 号住居址	26
図版 3 第 11 号住居址	27
図版 4 第 12 号住居址	28
図版 5 第 13 号住居址・第 14 号住居址	29
図版 6 第 14 号住居址	30
図版 7 第 15 号住居址	31
図版 8 出土土器	32

第1章 発掘調査の経緯

第1節 事業の経過

緊急地方道路整備事業(主要地方道伊那生田飯田線)の路線内の遺跡保護については、県文化課と県伊那建設事務所、駒ヶ根市教育委員会の三者による事前保護協議により、記録保存のための発掘調査を実施することとされていた。

平成11年度

駒ヶ根市東伊那栗林にある遊光遺跡が、本年度工事が行われる事となり、調査は駒ヶ根市からの再委託を受けて、駒ヶ根埋蔵文化財発掘調査会が実施することとした。

平成11年9月16日に、県伊那建設事務所と駒ヶ根市長との間で、事業費110万円の委託契約を締結し、それを受けて駒ヶ根市長と駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会との再委託契約を締結した。

9月16日に現場作業を開始した。今回検出された遺構の内、4軒の住居址が現市道の下に埋まっていることが判明し、市道の下の調査が必要となるが、現時点では市道を交通止めにすることは、他の場所で行われている道路工事との関連から不可能なため、発掘調査はこの箇所の工事に併せて行うこととし、一旦発掘作業を10月1日で中断することとした。

現場作業終了後、博物館にて遺物の洗浄・注記作業・復元作業を実施した。

その後、予算の関係上本年度中の当該箇所の工事は発注されないことが確定したため、協議の結果、残る現市道部分の発掘調査は、平成12年度に実施することとした。本年度の調査結果も併せて報告書にまとめるこことし、平成12年1月13日に65万円減額の契約の変更を行った。

平成11年度の事業は、平成12年3月24日で終了した。

平成12年度

昨年度未調査となっていた箇所を含めた一帯の工事の発注が、7月中に行われるということで、事業費65万円の委託契約を7月18日付けで県伊那建設事務所と市とで締結した。事業は昨年同様、駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会が実施することとし、7月24日に再委託契約を締結した。

7月中に発掘調査を行うよう準備を進めていたが、構梁工事の資材運搬道路として使用するため、資材の搬入終了を待つこととなり、発掘調査は8月23日から開始し、現場の作業は8月30日に終了した。

その後、遺物整理・図面整理など報告書の刊行作業を行い、報告書の刊行をもって事業を完了した。

事業費は、調査地区の搅乱による面積の減少等により35万円の減額の契約変更を行い、30万円である。

第2節 発掘調査の組織

○ 駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会（平成11・12年度）

顧問 吉江 修 深（駒ヶ根市教育委員長 平成11年 9月まで）
" 片桐 成 登（駒ヶ根市教育委員長 平成11年10月から）

会長 高坂 保（駒ヶ根市教育長 平成11年 9月まで）
" 中原 稲 雄（駒ヶ根市教育長 平成11年10月から）

理事 中村 雅 典（市教育委員会教育次長 平成12年3月まで）
" 小林 晃 一（ " 教育次長 平成12年4月から）
" 友野 良 一（市文化財審議会会长）
" 林 越（ " 副会長）
" 竹村 進（ " 委員 平成12年3月まで）
" 小池 金 義（ " 委員 平成12年4月から）
" 吉江 修 深（ " 委員 平成11年10月から）
" 新井 徳 博（ " 委員）
" 田中 清 文（ " 委員）
" 北澤 進（市教育委員会生涯学習課長 平成12年3月まで）
" 松村 勝 彦（ " 生涯学習課長 平成12年4月から）
" 気賀澤 進（ " 市立博物館長）

監事 赤須 弘 侑（駒ヶ根市収入役）
" 小平 協 平（駒ヶ根郷土研究会会长）

幹事 丹羽 文 雄（市教育委員会生涯学習課 平成12年3月まで）
" 石沢 真 一（ " 生涯学習課 平成12年4月から）
" 春日 崇（ " 生涯学習課）
" 田村 巴（ " 市立博物館）
" 湯沢 啓 子（ " 市立博物館）

○ 遺光遺跡発掘調査団

団長 友野 良一（日本考古学協会会員 発掘担当者）

副団長 気賀澤 進（日本考古学協会会員 発掘担当者）

調査員 北沢 雄喜（上伊那考古学会員）

" 田中 清文（長野県考古学会員）

" 吉沢 文夫（辻沢遺跡群研究会員）

現場主任 田村 巴（駒ヶ根市立博物館学芸員）

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡の立地 (第1図)

遊光遺跡は、駒ヶ根市東伊那栗林地籍に所在する。JR飯田線大田切駅から東へ約3kmの所に位置している。遺跡所在地の緯度経度は、北緯35度44分30秒～42秒、東経137度58分42秒から59分00秒である。標高は605～615mを測る。

駒ヶ根市は、長野県の南部伊那谷のほぼ中央に位置し、西には木曽山脈、東には赤石山脈、その前山である伊那山地が南北方向に並走し、その間を天竜川が南流している。この天竜川の左岸は、竜東地域と呼ばれ、合併前の中沢村・伊那村（現東伊那地区）が、段丘上に展開している。

東伊那は、伊那山地の主峰の一つ高島谷山で伊那市富県と、北西に位置する大久保地区で、北は伊那市西春近と、西は天竜川を挟んで宮田村と接している。南は市内中沢地区の原と接し、東は山を境に中沢地区の中曾倉・大曾倉に接している。西側は天竜川に面し市内赤穂地区と対している。

東伊那地区は、天竜川の河岸段丘上にあり、伊那山地の前山から流れ出し天竜川に注ぐ塩田川・天王川・唐沢川と新宮川によって、大きく三つの扇状台地に分かれている。当遺跡は東伊那地区のほぼ中央に位置し、塩田川と天王川の間の台地の南東部に位置し、東を流れる天王川に沿うように見られる。約500m北の台地上には、東伊那支所や東伊那小学校がある。遺跡の北から東には主要地方道伊那生田飯田線が走り、今回の調査は、この路線の改修工事によるもので、新路線は遺跡の北東部を通っている。遺跡は天王川に沿って南西に続く台地約4haに広がっている。

調査地点の地番は、2582から2584番地で、標高は615.5mほどである。現況は、畑と宅地で、南に続く遺跡の主要部分は、一部の水田を除けば畑で、ほぼ原地形を残しており、遺跡の保存状況は良好である。

東伊那地区は、西を流れる天竜川の河岸段丘上にあり、三つの段丘面を確認することが出来、当遺跡はその第二面に乗っている。天竜川との直線距離は、700から1000m、氾濫原との比高差は40m前後である。

遺跡の北東側には、天王川の流入によって湿地帯が形成されており、その西側には反目遺跡がある。湿地帯を挟んだ反目・遊光遺跡は、各時代にわたっての大集落跡があったことが確認されており、この湿地帯を利用しての稻作が行われていたものと考えられる。

東に位置する赤石山脈と伊那山地との間には、中央構造線が走っており、当地区の地質基盤は領家帶に属する岩盤から成っている。

当地区の下層には、伊那山地からの扇状地疊が厚く堆積し、その上に御岳山噴火物を主とするテフラ堆積物が覆っている形である。

当遺跡の基本層序は、耕作土 ソフトローム層 ハードローム層で、遺構はローム層まで掘り込んでいる。耕作土は、30センチ前後、ソフトロームは50センチほどの堆積を示している。



第1図 遊光遺跡位置図 ($S = 1:100,000$)

第2節 歴史的環境（第2図）

南西に開けた扇状台地に展開する東伊那地区は、古くから遺跡の宝庫として知られ、大正末年に発刊された「先史及び原始時代の上伊那」にも、多くの遺跡が紹介されている。また中世から戦国時代にかけては、台地の突端部を利用して多くの「城館」が造られた。

1 伊那村遺跡の発掘調査

東伊那地区的考古学を語る時、忘れてならないのは「伊那村遺跡」の発掘調査である。伊那村遺跡とは、当地区的南域に位置する 山田(18)、丸山(17)、きつね久保(20)、殿村(19) の四つの遺跡を総称したものである。現在はこれらを東伊那遺跡群と呼んでいる。ちなみに伊那村とは、合併前の旧村名である。四つの遺跡は、山麓に位置する山田遺跡から低位段丘面に位置する殿村遺跡へと垂直的分布を示しており、各遺跡の時代との関連性で注目された。

戰後間もない昭和24年から26年にかけて、旧伊那村が、独自で「村の歴史を調べよう」ということで学术調査を行ったもので、それは本当に画期的な出来事であった。ちょうど塩尻市の中出遺跡の発掘調査が行われていた頃である。

調査の結果、最高位にある山田遺跡からは、縄文時代中期後葉の住居址が6軒、丸山遺跡からは縄文時代中期後葉と弥生時代後期の住居址が各1軒ずつ、きつね久保遺跡からは弥生時代の住居址が4軒、さらに最も低位の段丘面に位置する殿村遺跡からは奈良時代末から平安時代にかけての住居址1軒が確認されている。

山田遺跡からは平成4年と9年の調査で、やはり同時期の堅穴式住居址5軒と土壙が確認されている。またきつね久保遺跡は南端部分に東中学校が建設されることとなり、昭和39年に発掘調査が実施され、同時期の住居址が新たに12軒、さらに平成7年の農道工事に伴う調査で、やはり同時期の住居址が2軒確認されている。殿村遺跡は、県営ほ場整備事業の区域内に組み込まれることとなり、極力埋め立てによる保存を図ったが、遺跡の南端部分を調査することとなり、昭和63年に発掘調査を行った。その結果、縄文時代の中期の後葉の住居址8軒と、縄文時代前期初頭から中葉にかけて、いわゆる中越期の住居址12軒と土壙を確認した。中越期の遺構は、市内で初めての発見であった。また弥生時代では住居址3軒と方形周溝墓1基を検出し、さらに奈良から平安時代の住居址を15軒確認している。

2 周辺の遺跡

以下、時代ごとに当地区的遺跡の概要に触れて行くこととする。

先土器時代の遺跡は、現在の所、当地区内からは確認されていない。

縄文時代の遺跡は、中期を主に多く確認されている。

反目南遺跡(11)からは、はっきりとした遺構を確認するには至らなかったが、早期の押型文土器の良好な資料が発見されている。

早期末から前期にかけての遺跡としては、先述の殿村遺跡の外に塩田遺跡(3)があり、住居址1軒が確認されている。

前中期から中期初頭としては、反目遺跡(10)があり堅穴式住居址が発見されている。

伊那谷では、縄文中期になると遺跡数が急激に増加し始め、大きな集落が営まれるようにな



- 1 箱
2 大久保城
3 上
4 青
5 青
6 栗林神社東
7 善
8 垣
9 上
10 反
11 反
12 遊
13 城
14 城
15 稲
16 稲
17 丸
18 山
19 殿
20 きつね久保
21 原
城
城
村
古城
村
城
古城
村
城
山
田

第2図 遊光遺跡・周辺遺跡位置図 (S = 1:15,000)

つてくる。反目遺跡では、縄文時代の住居址 5 9 軒のうち、中期中葉が 1 7 軒、後葉が 3 8 軒となっている。そのほかの遺跡、山田遺跡や殿村遺跡では、確認された住居址はすべて後葉のものである。市内の遺跡も同様な姿を示している。

後期・晩期になると、遺跡数は極端に少なくなる。青木北遺跡（5 の青木遺跡の北側）で、後期の環状配石群が、上塙田遺跡からは晩期の配石址が発見されている。弥生時代の遺跡は、市内他地区の中沢や赤穂地区に比べて遺跡の数は多く、大きな集落を営むものが多い。きつね久保遺跡や殿村遺跡については、先述したので省くこととする。

当遺跡のすぐ西に位置する反目遺跡からは後期の住居址が 1 7 軒発見され、きつね久保遺跡と並んで当期を代表する遺跡である。反目遺跡の北には、善込（1）や 1 0 軒の住居址と窯棺墓 1 基が確認された栗林神社東遺跡（6）がある。また城館跡の城村城址（13）からも、住居址が検出されている。反目の北西に位置する塙外上遺跡（8）も当期に属する遺跡である。当遊光遺跡や反目遺跡の西、一段下がった第 1 段丘面にある反目南遺跡からは、後期の住居址の外に、方形周溝墓 3 基が確認され注目される。

後述するが、当遊光遺跡からも 1 軒の住居址が発見されている。

古墳時代から奈良・平安時代 東伊那地区には、柏原古墳・桃山古墳など 3 基以上の円墳があったと云われるが、すべて消滅してしまい現存するものはない。

集落遺跡としては、当遺跡の外に、殿村遺跡・反目遺跡・反目南遺跡・上塙田遺跡がある。反目や反目南遺跡からは、礎石を伴った竪穴住居址が確認されており、大変興味深い。反目や反目南遺跡については、当遺跡との関連が強いので後述する。

中世 城館の多いことが注目される。天竜川に面した台地の突端部を利用してつくったものとしては、北から大久保城（2）、高田城（9）、遊光城（12）、福村城（15）、福村古城（14）がある。一部に住宅が建てるされるが、全体に原形を良く留めている。これらの城館より奥まった扇央部の段丘面の突端部を利用して造られているのが、青木城（4）、城村城（13）、城村古城（14）、原城（21）である。原城は中沢地蔵に位置する。1 3 の城村城は、孤立丘を幅広の深い堀で区画しており中世の後半の形態を示している。他の城館は、堀が浅く中世前半の形態を示していると思われる。

城館の多さとともに、当地区で注目すべきことは、中世期の石造物の存在である。2 の大久保城の北側の大久保蓮台場には、古い形式の宝鏡印塔が 5 基遺っており、その内 3 基は応永年間の銘が刻まれている。また同地には応永二十八年の銘のある六地蔵石燈も 1 基ある。また蓮台場から 5 0 0 mほど北東に位置する下塙田の箱塙（1）からは、平安末から鎌倉初期の五輪塔が烟より発見され、現在墓地に据えられている。

さらに、この五輪塔が発見された付近の烟より、宋銭を主に大量の古錢が常滑の煙に入りて発見されている。後述するが、当遊光遺跡からも、1 5 世紀末の土をかぶせた陸屋根式構造を持つ竪穴址が 1 基確認されている。

このように中世の遺構や遺物を多く遺す例は、郡内では少なく大変貴重であり、中世史の研究上で重要な位置を占めている。

3 遊光遺跡に関連する遺跡について

遊光遺跡の近くにあり、関連する遺跡と考えられる反目南遺跡と反目遺跡について、やや細かく触れておきたい。

第1節において述べたように、反目遺跡は湿地帯とその南に位置する住宅域を挟んで遊光遺跡の北西部に位置している。

反目遺跡は遊光遺跡とともに、県営ほ場整備事業の対象地区となり、昭和63年に遺跡の約三分の一近くを発掘調査した。確認された住居址は135軒、他には土壙69基、掘立柱式建物址3棟などがある。住居址の内訳は、縄文時代59　弥生時代17　古墳時代1　奈良・平安時代54　時期不明4である。

縄文期、台地に營みが始まるのは、前期末から中期初頭期からで、中期後葉に最盛期を迎えるが、発掘調査では中期末葉の住居址は確認されていない。調査対象外の畠から後期から晩期の土器が確認されているが、集落の形態を形造っていたとは考えにくい。住居址は、台地の中央から縁辺部に集中する傾向を見せてている。

弥生時代の住居址は、すべて後期に属するものである。住居址は、台地中央から奥、湿地帯方面に位置しており、既に住宅地となっている南城に広がって集落が展開するものと考えられる。

古墳時代は、後期の住居址が1軒のみの検出された。奈良から平安時代にかけての住居址は、54軒、奈良時代前期のものは、今の所確認されていない。主体は平安時代中期である。この傾向が遺跡全体の姿を示すかは定かでない。当遺跡からは、奈良から平安時代初頭と平安時代中期の礎石を持つ住居址が1軒ずつ発見されている。

後述する反目南遺跡の3例と併せ、この一帯から5例確認されたこととなる。また墨書土器も多く発見されており、特定の住居址に集中しており注目される。その他円面鏡や灰釉平瓶など優品が多く出土している。

反目南遺跡は、反目遺跡の南西、一段低い低位段丘上に位置している。県営ほ場整備事業の対象地区となり、昭和62年に発掘調査を実施した。極力埋め立て保存を図ることとしたため、遺跡の一部の調査であり、反目遺跡同様全貌は明らかになっていない。

調査の結果は、次のとおりである。

縄文時代では、遺構は検出できなかったが、早期の桶沢式土器に先行する土器群が、集中的に出土している。

弥生時代では、後期の住居址2軒とともに方形周溝墓3基が発見されており注目される。

6世紀前後の古墳時代の住居址2軒が発見された。土壙からの出土も含め、多くの土器に朱が施されており、祭祀との関係を強く窺わせるものである。

奈良から平安時代では、7軒の住居址が発見されている。反目遺跡同様、奈良時代前半の家は確認されていない。とりわけ注目されるのは、礎石を持った堅穴住居址が、奈良時代末から平安時代初頭、平安時代前期、平安時代後期の各時期に、1軒ずつ確認されていることである。概期の住居址の四割が礎石を持っていることの特異性をどう考えるべきか、今後の大きな課題である。

今回発掘調査を行った遊光遺跡は、今の所縄文期の住居址は確認されていないが、同様な時代構成を示しており、この三つの遺跡を一体のものとして考えて行くことによって、反目南遺跡の特殊性が解明されるものと考えられる。とりわけ、反目遺跡と遊光遺跡は一つの集落を形成していたものと考えるのが妥当であろう。

第3章 発掘調査

第1節 調査の経過(第3・4図)

1 過去の調査について

遊光遺跡は、台地上約4haに展開している。北側の一部は、住宅地や水田として利用されているが、遺跡の八割がたは畠となっていて保存状態は良好である。

遺跡から一段下がった段丘面には、中世の遊光城址がある。現在、水田として利用されているが、南北方向に走る堀跡と土塁の一部が遺されている。台地の西縁には馬瀬口などの地名も遺り、この遊光遺跡も城と一緒にものと考えるべきものである。

水田部分が県営整備事業の対象となり、極力埋め立て保存を図ることとし、昭和63年に、栗林集会所(第3図参照)の南側の水田の一部の調査を実施した(第4図参照)。

調査の結果は、住居址10軒、土壙18基、建物址1棟が検出されている。住居址の時代別の内訳は、弥生時代後期前葉のものが1軒、古墳時代4軒、奈良・平安時代3軒、中世1軒、不明1軒である。

古墳時代の1軒は、前期のもので、この時期の住居址は、市内では初めてである。上伊那においても概期の住居址例は少ない。この時期の住居址の発見によって、反目遺跡と一緒にとなったこの台地に、弥生時代から古墳時代にかけて連続して生活が営まれていた可能性が示された点で注目したい。

中世期の1軒は、土をかぶせた陸屋根式構造を持つものであることが、国立奈良文化財研究所の宮本長二郎氏によって、明らかにされた。時期は出土した摺鉢から15世紀末と考えている。先に述べた南に存在する遊光城の日常居住区域であったことが、証明されたものと考える。土壙からは治平元寶も出土している。建物址は、はっきりした共判遺物はなかったが、中世期のものと考えられる。

2 調査概要

今回の調査は、主要地方道伊那生田飯田線の整備に伴うもので、当遺跡部分は新しく道路を開設するものである。

当遺跡を通過する道路延長は約250mで、遺跡の北東部分を通過している。北と南はほ場整備事業の実施済み区間であり、今回の調査対象区間は、栗林集会所から北へ80mの区間である。対象区域の南部分は、栗林集会所の移転跡地、北部分は畠である。

調査方法は、バックホウによって全面表土をはねた後、遺構を確認する方法をとった。

集会所の跡地については、建設時の擾乱がローム層にまで及び、また集会所と地続きの畠の一部も深く掘って耕作土の入れ替えが行われていることから、調査を実施出来たのは、畠の北側部分、35mの区間であった。

市道の現道部分は他の工事との関係から、当区間の工事に併せて行うこととし、当初は畠部分の調査を実施した。当区間の工事が平成12年度にずれ込んだため、発掘調査は、11・12年度の2箇年にわたって行った。

遺構番号は、前回の調査の続き番号を使用している。今回の調査に関わるものは、住居址番号11番からである。

確認された遺構は、堅穴式住居址5軒である。

12年度の調査は、市道部分の調査で、昨年確認した住居址の遺り部分の精査が主体である。道路の半分から西は、旧水路のため搅乱されていた。新たな遺構の検出はなかった。

3 発掘調査作業日誌（抄）

平成11年度



11年度調査状況

9月16日 テント設営。バックホウにて表土剥ぎ 煙の北側部分の遺構確認を行う。

9月17日 昨日に引き続き遺構の検出に務める。耕作による搅乱が激しくはっきりしないが、5箇所くらい遺構らしき落ち込みを確認。北西部（1号）と北側（2号）の落ちこみを精査。

9月18日 昨日に続き、落ち込み精査を行った結果、住居址と判明する。1号住居址は遺物少ない。ほぼ掘り下げを完了。西の市道下に統いている。2号住居址は堀込みが深い。

9月21日 2号住居址の精査続行。中央西側の落ちこみ（13号）の掘り下げ。

9月24日 2号・13号住居址の精査。台風に備えテントをたたむ。

9月25日 テント設営。12・13号住居址精査。両住居址とも市道の下に統いている。東側中央14号住居址精査。14号住居址の東半分は用地外に統いている。

9月26日 11号・12号・13号住居址清掃、写真撮影。13号住居址中央部は、後世の構のため、床面は壊されている。

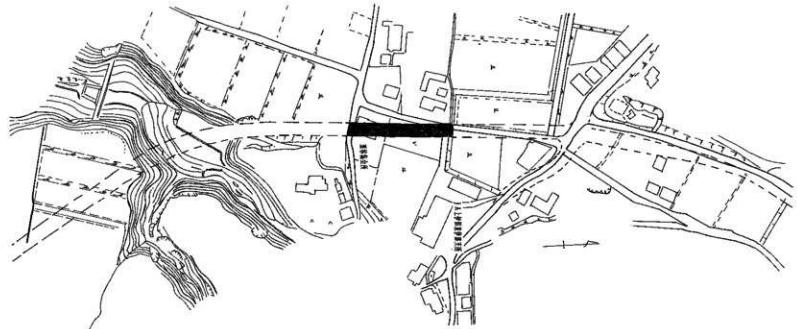
- 9月28日 14号住居址精査、清掃。北壁中央と南西壁ぎわに遺物が集中して出土。南側の15号住居址の掘り下げ。
- 9月29日 14号住居址清掃。15号住居址精査及び清掃。
- 9月30日 全体清掃。写真撮影。道具の洗浄及び片付け。現場作業は本日午前中で終了。午後より測量。
- 10月1日 測量終了。

平成12年度

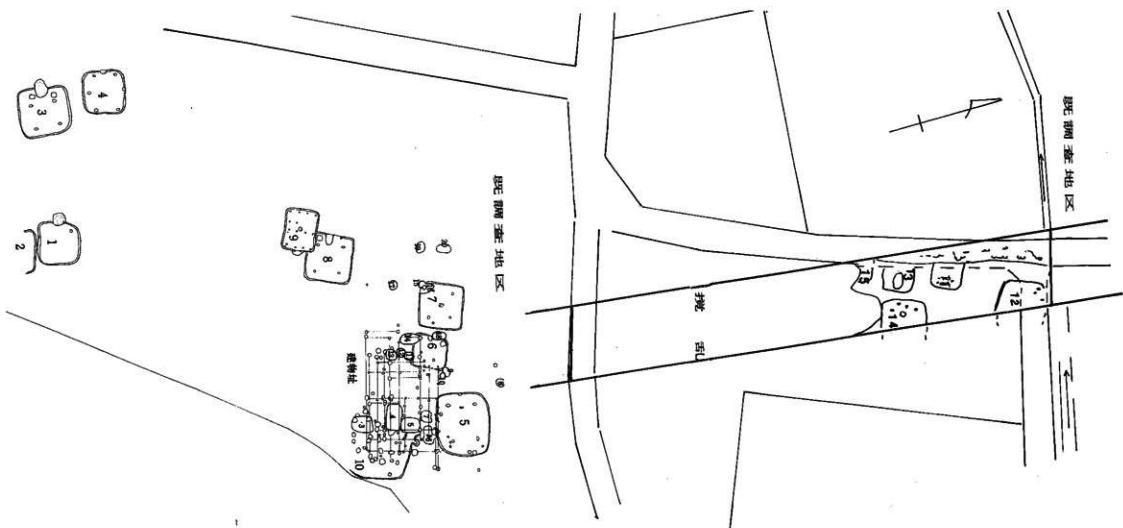


12年度調査状況

- 8月23日 現市道の舗装剥ぎを道路工事の請負業者で実施。舗装下の採石を重機にて除去したのち、遺構面の検出に務める。道路の西部部分は、旧水路のため搅乱されている。15号住居址の続きと考えられる落ち込みを確認し精査。西壁ぎわに焼土を確認。
- 8月24日 昨年検出した11号・13号住居址の西側部分の確認を行う。13号住居址は、旧水路による搅乱のため確認出来ない。11号住居址は、西壁は搅乱によって壊されるも、一部残存精査。西壁12号住居址の北側現道部分の表土除去をバックホウで行う。
- 8月25日 12号住居址精査。11号・15号住居址測量。
- 8月26日 12号住居址精査。西壁を確認、北の壁は道路の擁壁のため壊されている。
- 8月29日 12号住居址清掃。発掘作業は測量を残し本日で終了。
- 8月30日 測量作業。すべての作業を終了。

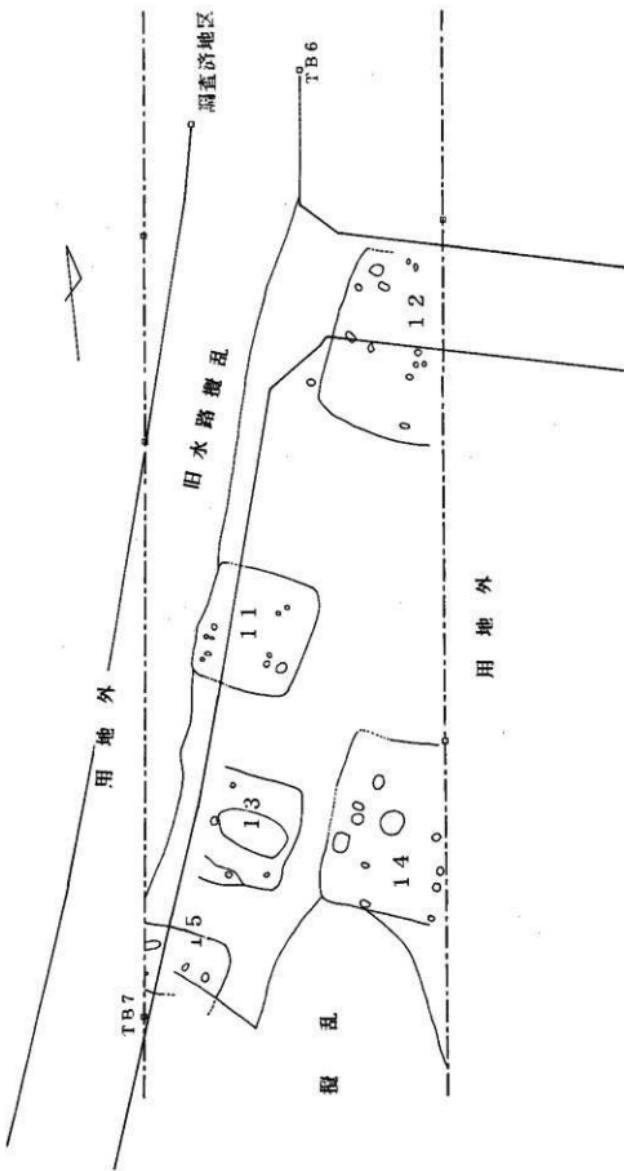


第3図 遊光遺跡調査概要図 (S = 1:3,000)



第4図 遊光遺跡遺構全体図 (S = 1:600)

第5圖 調查遺構全體圖 ($S = 1:200$)



第2節 遺構と遺物

1 第11号住居址（第6・7図 図版2・3）

遺構 本住居址は、第13号住居址の北に位置している。西壁から1m程度東で、道路の擁壁により、南北に幅約50cmの帯状に破壊されている。

プランは隅丸方形を呈し、規模は5×4.5mを測る。長軸方向は、N-13°-Wである。壁高は東側が50cmで南・北側は40cm、西側は一部を残し旧水路の搅乱により壊されており、現存部分の壁高は10cmほどである。床面はロームを堅く叩き締めている。

主柱穴は、東側に2本確認できるが、西側は不明である。P3とP4の西側で少量の炭化材と焼土が検出された。竈や炉跡と考えられるものは発見されていない。

遺物 遺物は少ない。土器はいずれも土師器であり、北西壁に集中して出土している。

1は器台の脚部で、径1.2cm前後の孔が3箇所あけられている。焼きは良くない。

2は高环の脚部で、赤褐色を呈し堅緻である。1・2とも外面はヘラミガキ、襤部にはナデ網目が施されている。

3は多孔の甌の底部である。4は甌の上半部であり、堅緻に焼かれている。外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリがなされている。

石器は5の砥石が出土している。2面が良く使われている。

時期は長野県史編年の古墳時代二期に属する。昭和63年の当遺跡の発掘調査でも概期の住居址が1軒確認されている。

2 第12号住居址（第8～10図 図版4・8）

遺構 本住居址は調査区域の北東隅に位置し、東は調査区域外のため未調査となっている。また、北側の壁は道路の擁壁のために壊されている。

プラン、規模は北側と東側が不明のため判然としないが、南北の現況部で7mを側ることができ大型の住居址である。壁高は南で40cm、西側では旧水田のための削平で20cm前後である。

北西部と中央南部に深い柱穴が確認されているが、南西部には検出されていない。南西隅の壁外にピットが検出されている。床面はほぼたいらで、ロームを堅く叩き締めている。

遺物 遺物は少ない。3は台环甌の底部から脚台上部の部位である。4は器台の器受部である。5は小型甌で口縁部と胴上半部の一部が欠落している。頸部に波状文がわずかに見られる。内部には接合の痕跡が認められる。

覆土中より石器5点が出土している。

1は有肩扁状石器、2は打製石斧、6は砥石で1面のみ使用している。7は打製裁切具、8は打製の石包丁である。石質は2と6は緑色岩類、他は硬砂石である。

時期は弥生時代後期前半に属すると考えられる。

3 第13号住居址（第11図 図版5）

遺構 本住居址は第14号住居址の西に位置しており、北に第11号、南に第15号住居址がある。西側は道路の擁壁及び旧水路の攪乱によって失われている。また中央部が梢円形に広く攪乱されている。

南側が一段高くなっている。プランは隅丸方形と思われ、規模は南北の現況部で4.5mを測る。壁高は30cm前後である。P2南に焼土が検出されている。

遺物 遺物は少なく、土師器の破片が出土しているが図化出来るものはない。時期は定かでない。

4 第14号住居址（第12～14図 図版5・6・8）

遺構 本住居址は第13号住居址の東、第12号住居址の南に位置している。東は調査区域外であり、西壁の中央部と北壁の西隅は攪乱により壁がない。

プランは隅丸方形と思われ、規模は南北で7mを現況部で測ることができる。西壁の中央部を除き周溝が見られる。壁高は北側で40cm、南と西側は30cm前後である。床面は堅く叩き縮められている。

P1とP5が主柱穴と考えられる。竈は東に付くものと思われる。

遺物 土器は土師器が多く、須恵器は6のみである。他に覆土中から縄文式土器と灰釉陶器、施釉陶器が若干出土している。

1～5は小型の土師器である。1は境で外面に部分的にハケ目がみられ、内面はヘラミガキがなされている。2～5は壺である。2・4は口縁部がわずかに外反するもので、内外面とも丹念なヘラミガキ調整がなされている。3は内面が黒色処理されており、調整は内外面ともヘラミガキである。5は外面下半部にヘラケズリ痕が見られる。

7・9は甕の上半部である。7の外面頸部、9の内外面はハケ目調整がなされている。8・13は単孔の甕で、13の接合部は厚く内面では段差を残す部分がある。

10・11は高壺の脚部で外面はヘラミガキが、内面には指ナデ痕が見られる。12は器台の脚部である。

6は須恵器の壺蓋である。灰褐色を呈し、外面には一部自然釉がかかる。外面はヘラケズリ、内面はナデ調整がなされている。

石器は「こもで石」と呼ばれる編物用錐石が13点出土しており、内11点は北西壁際の床面からまとまって出土している。右の計測表に示すように石質は硬砂石が8点、緑岩石類が4点、砂石が1点である。13の1点のみ欠損品である。

時期は6世紀前半、古墳時代IV期の中段階に比定できるであろう。

番	長さ	幅	厚さ	重量	石質
1	15.5	6.4	4.7	650	砂石
2	13.0	5.4	3.9	490	硬砂石
3	16.2	4.7	3.5	490	緑岩石類
4	13.2	3.8	3.7	320	硬砂石
5	12.7	5.2	3.7	350	硬砂石
6	18.8	5.1	1.9	430	緑岩石類
7	15.3	5.2	4.8	665	緑岩石類
8	14.3	5.8	3.8	470	硬砂石
9	11.7	4.0	3.6	290	緑岩石類
10	14.1	6.5	4.4	650	硬砂石
11	16.1	6.0	3.1	480	硬砂石
12	13.0	6.0	4.6	570	硬砂石
13	(12.2)	8.0	5.0	(560)	硬砂石

編物用錐石計測表

(単位 cm g)

5 第15号住居址（第15・16図 図版7・8）

遺構 本住居址は第13号住居址の南に位置している。西は調査区域外であり、南側の大部分は耕土の入れ替えにより搅乱されている。

壁は東から北にかけて確認できたのみで、プラン・規模は不明である。壁高は北と東が20cm前後である。

床は全体に軟弱である。西側には焼土が検出されている。

遺物 遺物は少ない。1は土師器の坏で内面に丹念なヘラミガキが見られる。2は砥石である。

時期は土器が少なくはっきりしないが平安時代の始めと考えられる。

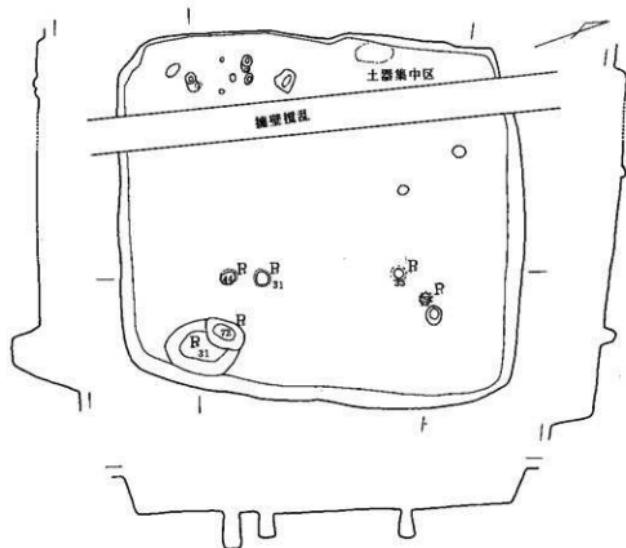
第4章 まとめ

今回の調査は、道路敷地内という狭い範囲のもので、その上調査対象区域の半分以上は、過去に搅乱されており、遺構の検出は出来なかった。

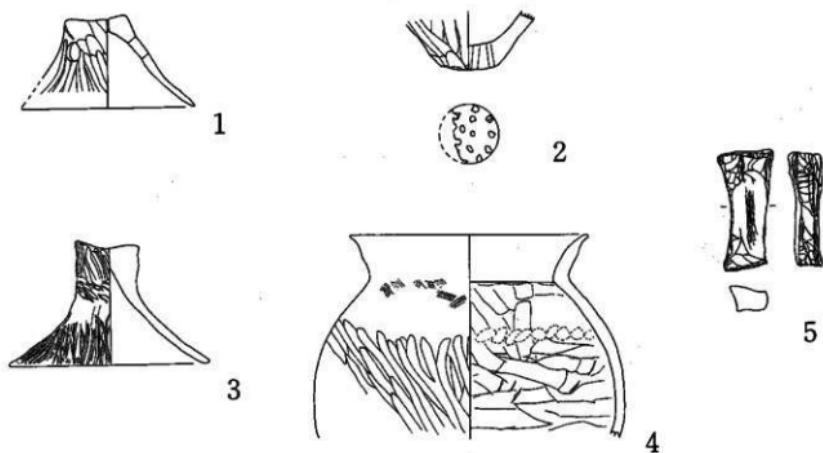
今回の調査で確認された遺構は、竪穴式住居址5軒である。時期がはっきりしたのは弥生時代1軒、古墳時代2軒、平安時代1軒の4軒である。これは前回の調査と同じ傾向を見せており、縄文時代の遺構は、今回も確認されなかった。西に位置する反目遺跡と一体の遺跡として考えた場合、縄文時代の集落の主体は、西側の台地縁辺に集中していることが、今回の調査でも証明されたものと考えられる。

まだ空白期が見られるものの、古墳時代II期に属する住居址（第11号）が今回も確認されたことから、この台地に広がる集落が、弥生時代から古墳時代につながっていたことの可能性が一段と強くなったと言え、今後の調査によって、空白の時期の遺構が明らかになるものと考える。

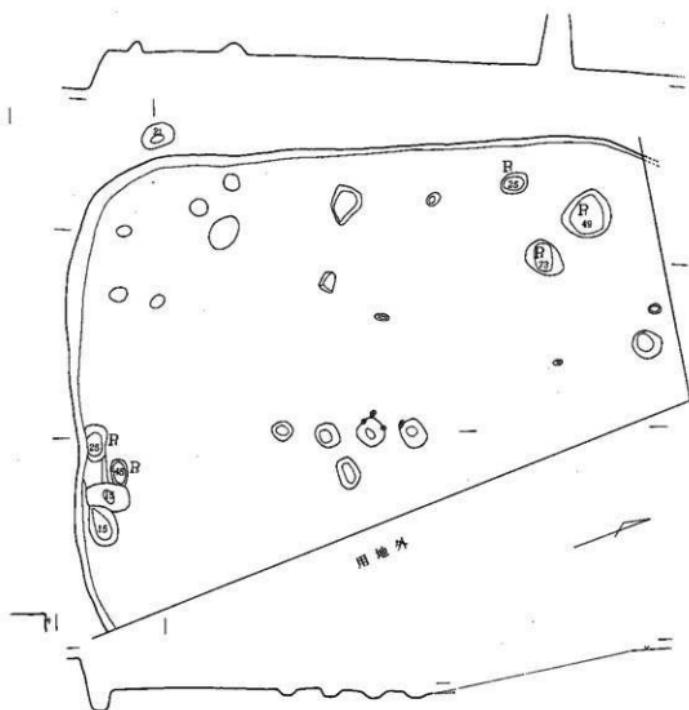
今回の調査によって、反目遺跡を含めたこの一帯の重要性がますます深まったと言える。開発からこの遺された遺跡をどのように保護していくか、今後の大きな課題である。



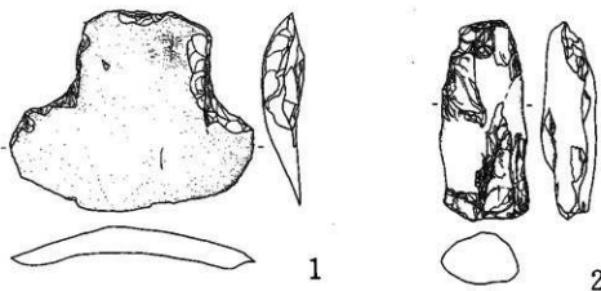
第6図 第11号住居址実測図 (S = 1:60)



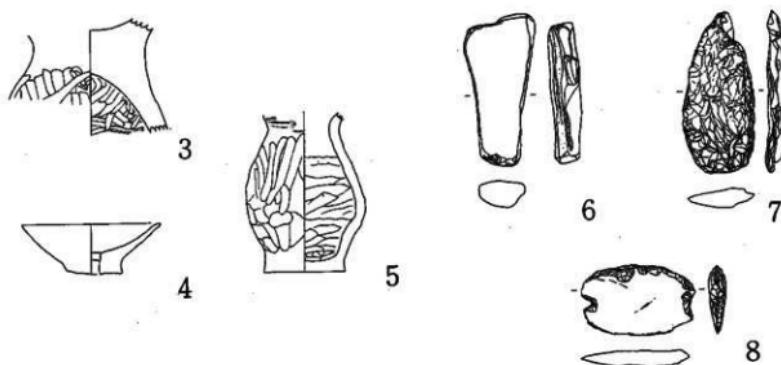
第7図 第11号住居址出土遺物 ($\frac{1}{3}$)



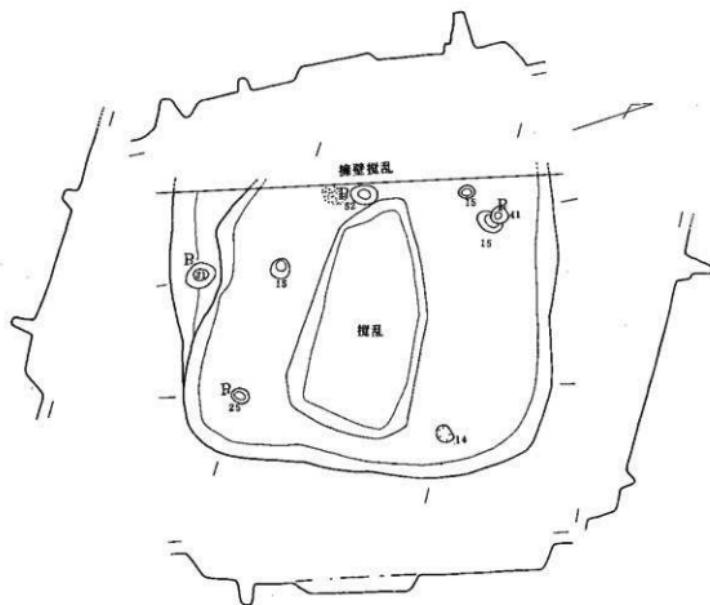
第8図 第12号住居址実測図 (S = 1:60)



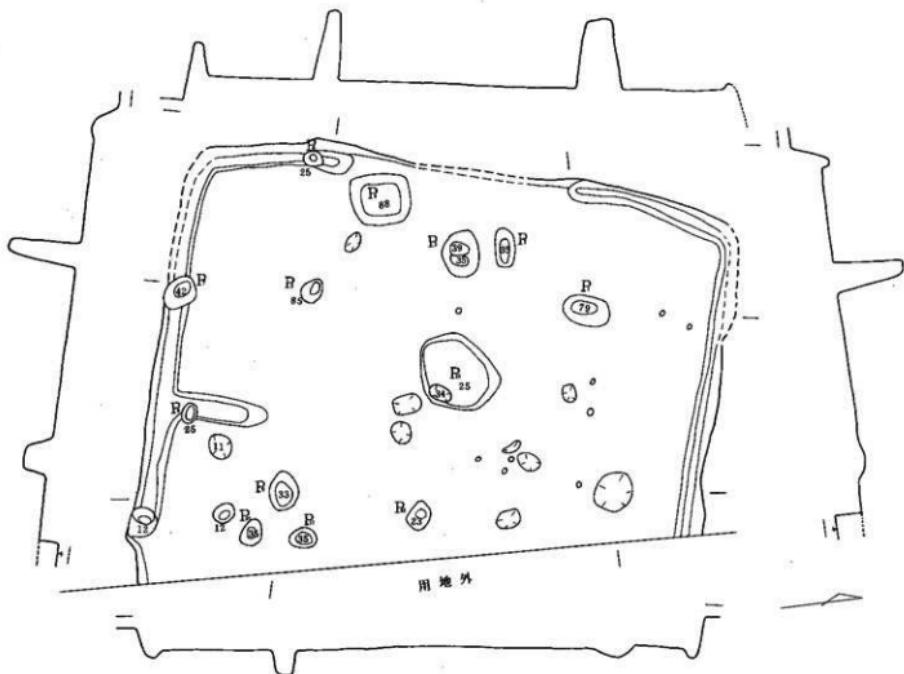
第9図 第12号住居址出土遺物 (1/3)



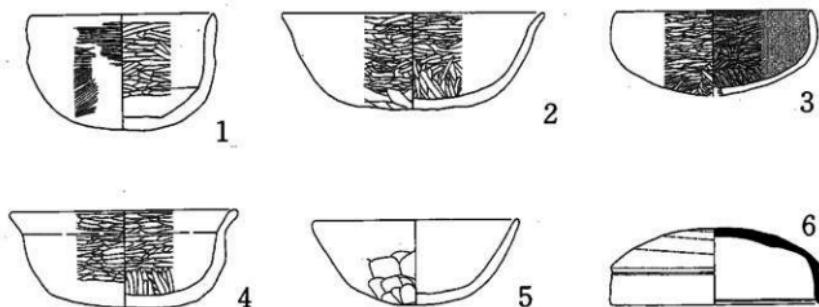
第10図 第12号住居址出土遺物 (1/3)



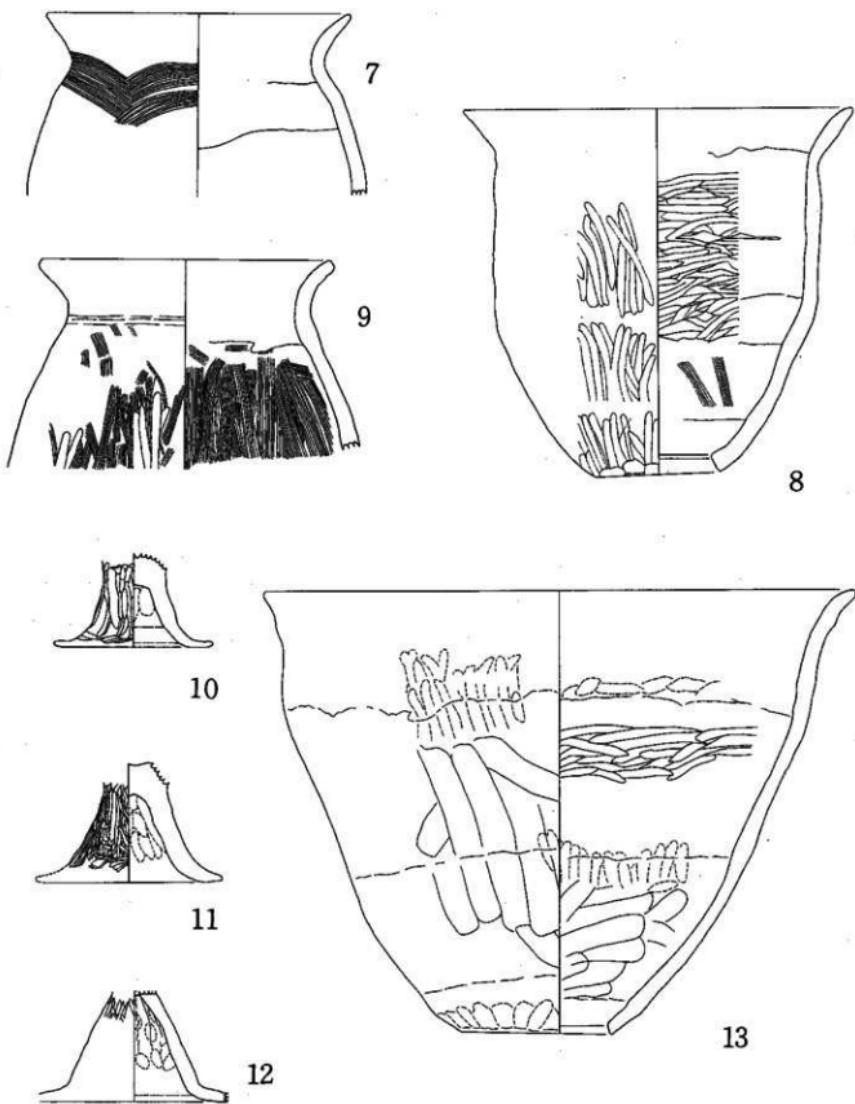
第11図 第13号住居址実測図 (S = 1:60)



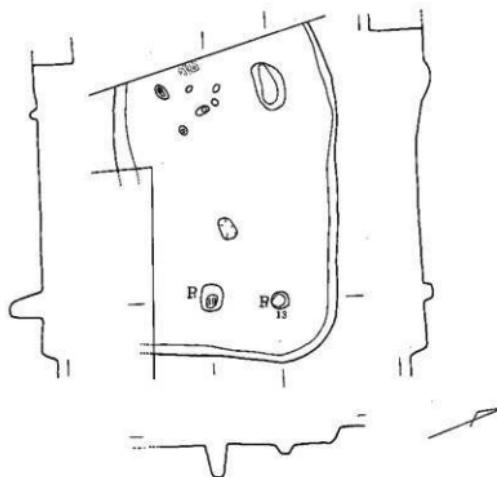
第12図 第14号住居址実測図 (S = 1:60)



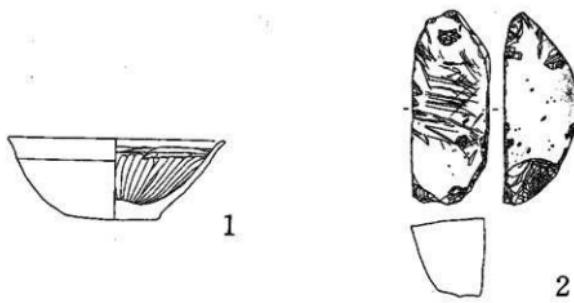
第13図 第14号住居址出土遺物 ($\frac{1}{3}$)



第14図 第14号住居址出土遺物 ($\frac{1}{3}$)

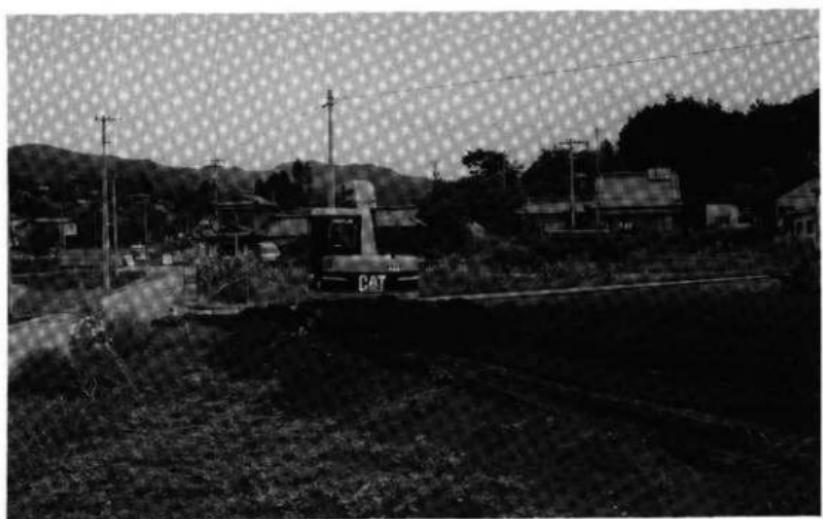
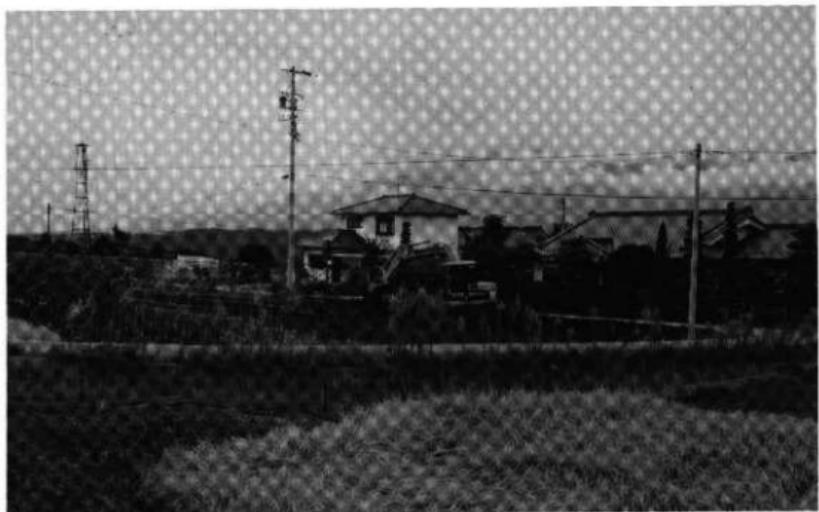


第15図 第15号住居址実測図 (S = 1:60)



第16図 第15号住居址出土遺物 ($\frac{1}{3}$)

図版1 造跡透影(上 北東より・下 南より)



図版2 遺構全影(上)と第11号住居址(下)



北より 11年度調査



北より 11年度調査

図版3 第11号住居址



南より 12年度調査



12年度調査

図版4 第12号住居址（南より）

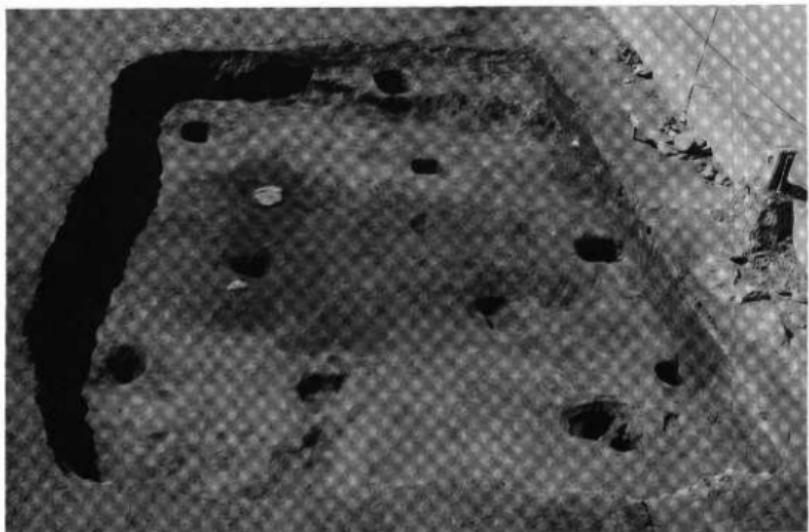


11年度調査

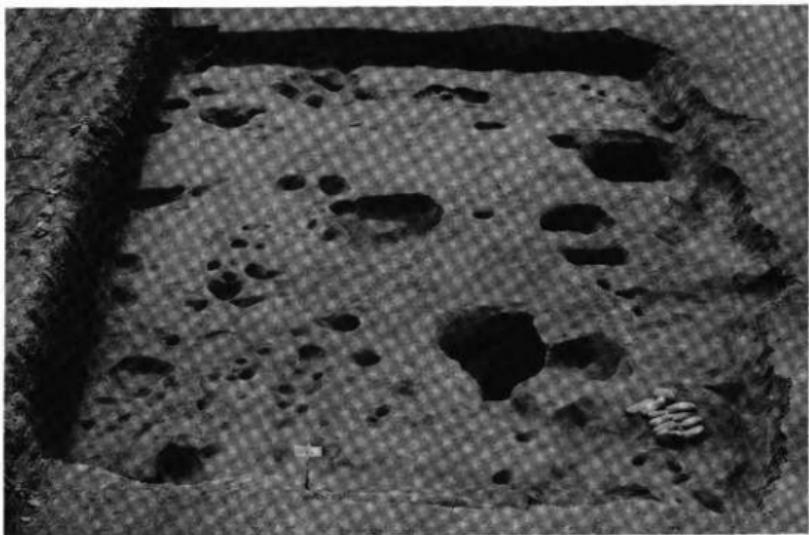


12年度調査

図版5 第13号住居址（上）・第14号住居址（下）

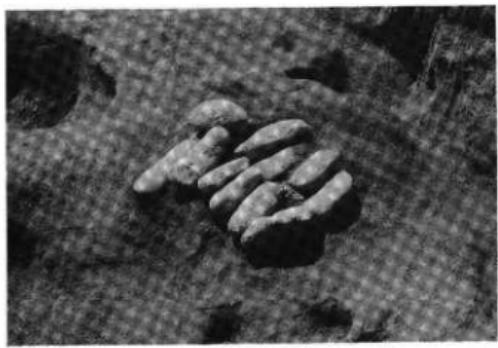
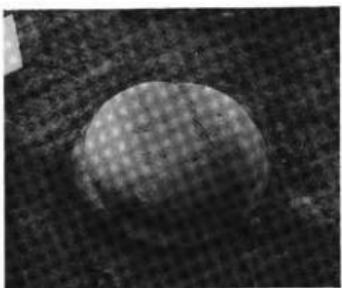


北より 11年度調査



北より 11年度調査

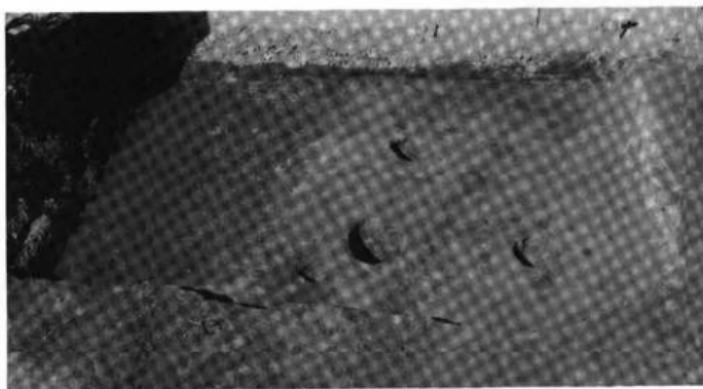
圖版 6 第14号住居址



図版7 第15号住居址



南より 12年度調査



東より 12年度調査

図版 8 出土土器



1 第12号住居址 - 5



2 第14号住居址 - 8



3 第14号住居址 - 13



4 第14号住居址 - 1



5 第14号住居址 - 2



6 第14号住居址 - 4



7 第15号住居址 - 1

注 少数字は遺物番号

報告書抄録

ふりがな	めぐらいせき					
書名	遊光遺跡					
副書名	緊急地方道路整備B事業(平成11年度)埋蔵文化財発掘調査 緊急地方道路整備A事業(平成12年度)					
シリーズ名称	発掘調査報告第39集					
編著者名	気賀澤 進 田村 巴					
編集機関	遊光遺跡発掘調査団					
所在地	〒399-4115 長野県駒ヶ根市上穂栄町23番1号 駒ヶ根市立博物館					
発行年月日	西暦 2000年12月25日					
所収遺跡	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積
遊光遺跡	長野県駒ヶ根市 東伊那	市町村 20210 遺跡番号 85	35度 44分 40秒	137度 58分 40秒	1999.9.16 ~ 10.1 2000.8.23 ~ 8.30	300 m ² 30 m ²
調査原因	主要地方道伊那生田飯田線改修工事に伴う事前調査					
所収 遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
遊光遺跡	落	弥生時代 後期	竪穴住居址 1基	小型壺 高壺 台壺甕 有肩扁状石器 砥石 石包丁	特になし	
		古墳時代	竪穴住居址 2基	土師器 甕 壺 墓 高壺 甕 須恵器 蓋 織物用錐石	特になし	
	平安時代	竪穴住居 1基	土師器 壺	特になし		
	不明	竪穴住居 1基	土師器破片 少量	特になし		

遊光遺跡

—平成11・12年度発掘調査—

平成12年12月27日 発行

編集 諸ヶ原市上穂栄町23番1号市立博物館内
遊光遺跡発掘調査団
発行 諸ヶ原市赤須町20番1号
諸ヶ原市教育委員会
印刷 諸ヶ原市赤穂2583-1
株式会社アクシズ